

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

平成2年度は、夏期が記録的な高温、少雨で経過したため、稲及び麦類の病害は全般的に少発生であった。

育苗期の水稲では、苗立枯病が全般的に少発生であったが、福岡、佐賀両県の早期水稲でピシウム菌による急性萎ちょう症（ムレ苗）が多発した。ばか苗病の発生は種子消毒の徹底によって全般的に少なかった。しかし、大分県では多発生となり、ペノミル耐性菌の増加が原因と考えられた。

本田期では、陽性型の梅雨とその後の高温多照のため、葉いもち、穂いもちともに全般的に少発生にとどまった。ばか苗病も全般的に並～少発生であったが、育苗期に発生が多かった大分県では、本田でも多発生となった。

夏期の高温のため多発が心配された紋枯病は、宮崎県の普通期水稲でやや多発した以外は、当初の予想に反して全般的に並～少発生にとどまった。

近年、早生品種を中心に毎年多発し、九州地域で大きな問題となっているもみ枯細菌病は、本年も佐賀、長崎、大分、宮崎、鹿児島各県でやや多～多発生となった。出穂開花期の高温と降雨が原因と考えられた。

こま葉枯病及び縞葉枯病は、一部でやや多発生となったものの、全般的には並～少発生にとどまった。

本年は台風の接近が多かったにもかかわらず、白葉枯病は全般的に少発生にとどまった。これは、基盤整備が進んで病原細菌の中間宿主となるサヤヌカグサなどの雑草が減少したことが原因と考えられ、今後も本病はあまり問題とはならないのではないかと推察された。

地域的に発生がみられたものとしては、内穎褐変病が宮崎、鹿児島両県で多発した。これは出穂開花期の高温と降雨が原因と考えられた。佐賀県では7月の集中豪雨による冠水のため、黄化萎縮病がやや多発した。

麦類では、2～3月が高温多雨で経過したため軟弱徒長ぎみの生育となり、全般的にうどんこ病が多発した。赤かび病は、大麦では宮崎県で、小麦では佐賀県でやや多～多発生となったが、他県では並～少発生にとどまった。縞萎縮病は、各地で抵抗性品種の作付けが増加したため、いずれの県でも並～少発生にとどまった。さび病類では、佐賀県で赤さび病が多発生、長崎県でやや多発生となったが、他の県では並～少発生にとどまった。黒穂病類が鹿児島県でやや多発した。

2. 野菜・畑作物

施設栽培におけるトマト、ナス、キュウリ、イチゴなど果菜類の灰色かび病は、全般的には平年並みの発生で

あったが、一部でやや多発生となった。冬期の天候不順と薬剤耐性菌の増加が多発生の要因と考えられた。

ナス科野菜の青枯病は全般的には並～少発生にとどまったが、大分県の夏秋トマトでやや多発した。トマト根腐萎ちょう病が福岡県と宮崎県でやや多発生となったが、罹病性品種の自根栽培の増加や抵抗性台木の不足が原因となったようである。トマトモザイク病は、弱毒ウイルスの普及によって全般的に並～少発生に抑えられたが、大分県でウイルスによる“まだら果”が問題となった。トマト小粒菌核病が大分、鹿児島両県で初めて発生が確認された。ナスすすかび病は全般的に並～少発生にとどまった。ナス半身萎ちょう病が、大分県白杵市において、九州では初めて発生が確認された。ピーマンでは台風による浸冠水のため疫病が多発し、宮崎県では警報が、鹿児島県では注意報が出された。

キュウリでは各地でべと病が多発したが、台風による圃場の浸冠水、冬期の天候不順などが原因と考えられた。これまで夏秋キュウリを中心に発生していた褐斑病が、宮崎県では施設、露地ともに多発し、10月29日に注意報が出された。佐賀県でも本病の発生が目立った。うどんこ病が各地でやや多発生となった。メロン黒点根腐病が長崎県で多発し、黒点根腐病やピシウム菌による急性萎ちょう症が鹿児島県で発生した。長崎県ではCMV—ラゲナリア系によるモザイク病の発生が確認された。えそ斑点病の発生が沖縄県で確認され、九州、沖縄全県が本病の発生地域となった。スイカでは全般的に目立った病害の発生はなかったが、灰白色斑紋病が沖縄県で局所的に多発した。カボチャでは、台風の影響でつる枯病、褐斑細菌病、白斑病、疫病、軟腐病などが多発し、宮崎、鹿児島両県で疫病の注意報が出された。

イチゴでは、罹病性品種「とよのか」の栽培面積の増加に伴って、うどんこ病が各地で多発した。炭そ病は全般的に少発生であった。レタスでは、菌核病とべと病が佐賀県で、軟腐病が沖縄県でやや多～多発生となった。

タマネギでは、べと病が福岡、佐賀両県で、白色疫病が福岡県で、白斑葉枯病が佐賀県でそれぞれやや多～多発生となった。ネギ軟腐病が台風後に鹿児島県で多発した。ニラ黒腐菌核病が大分県で、ゴボウ菌核病が鹿児島県で初めて発生が確認された。

近年問題となってきたアブラナ科野菜の根こぶ病は、長崎県のハクサイ及び大分県のキャベツでやや多～多発生となった。ダイコン軟腐病、キャベツ黒腐病、黒斑細菌病などの細菌病が、鹿児島、沖縄両県で多発した。9～10月の台風の影響で、インゲンかき枯病が鹿児島県で多発した。

ジャガイモでは疫病の注意報が長崎県で出されたが、

長崎、宮崎両県でやや多発生となった。ダイズ及びサツマイモでは、発生の目立った病害はなかった。トウモロコシ南方さび病が大分県で初めて発生が確認され、他県でも発生が増加傾向にあった。

3. 果樹

昨年各樹種で多発した灰色かび病は、本年は天候にめぐまれたため全般的には少発生にとどまった。

カンキツでは、春先の気温が高く感染時期が長くなったため、そうか病が全般的にやや多発生となった。梅雨期の降水量が少なかったため、黒点病、かいよう病が、佐賀県で多発したものの、全般的には並～少発生にとどまった。ピワでは灰斑病が長崎、鹿児島両県でやや多発生となったが、夏期の高温が原因と考えられた。

ナシでは、黒星病が佐賀、熊本、大分の各県でやや多～多発生となり、うどんこ病が長崎県でやや多発生した。近年問題となっているブドウ枝膨病は福岡県でやや多発生となったが、6～8月の少雨のため他県では平年並みの発生にとどまった。モモでは、せん孔細菌病が熊本、大分両県でやや多発生となったが、4～5月の降雨と低温が原因と考えられた。縮葉病が福岡県で、炭そ病が鹿児島県で多発した。

カキ炭そ病が鹿児島県で多発した。イチジク株枯病が福岡県で初めて発生が確認された。キウイフルーツ、クリ、パイナップル、マンゴウ、バナナでは、いずれの病害も少～平年並みの発生にとどまった。

4. 茶樹・特用作物

茶樹では、輪斑病菌による新梢枯死症が佐賀県でやや多発生となり、程度は軽いが発生が拡大の傾向にあった。炭そ病は全般的に並～少発生であった。

サトウキビの黒穂病、葉焼病、さび病、イグサ紋枯病は、いずれも平年並～少発生にとどまった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

(害虫発生概況)

1. 稲・麦

セジロウカの初飛来は昨年とは異なり、全般的に早め(福岡、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、八重山)が多く、その他は平年並み(佐賀、大分)か、晩めの飛来(沖縄本島)であった。主飛来は6月3・4半旬～7月1・2半旬にわたり、飛来回数、飛来量とも平年を上回った。本田での増殖も著しく、生育抑制、葉の枯れ上がり等が福岡、大分、鹿児島でみられた。トビイロウカも全般的に早期の飛来とやや多ないし多量飛来であったが、沖縄本島では少量飛来であった。一部早期・早植稲での増殖と被害(福岡、大分)がみられた。普通期水稲でも一部坪枯れ(佐賀、鹿児島)がでた。短翅率が高かったことと初期の高温が本田での増殖を促したとみられる。コブノメイガの飛来もウンカ類とほぼ同時期で発生量は全

般に並みまたは少であったが、佐賀と鹿児島はやや多発生であった。

ヒメトビウカは福岡では越冬量は多かったが本田での発生は少ないし並みとなり、その他の県でも並みないし少の越冬及び発生量で、保毒虫率は1.9%(第1世代、長崎)であった。箱施薬等による同時防除により、特に問題はなかった。ツマグロヨコバイも一部の県で早期水稲等で多発し、一部吸汁害がみられた。越冬世代と第1世代の無防除及び梅雨後の高温が局地的多発の要因とみられる。その他の県では並み、少発生で特に問題はなかった。

イネミズゾウムシは暖冬のため越冬量が多く、早い時期から多発生をみた県が4県(福岡、佐賀、長崎、大分)、晩く多発生の県が2県(宮崎、鹿児島)、その他は並みの発生(熊本、沖縄)であったが、どの県でも発生面積は拡大した。特に沖縄県では海を隔てた西表島にも新発生をみた。早期及び早植栽培(コシヒカリ)及び中・山間地での被害が各地で目立った。

スクミリンゴガイも暖冬による越冬虫が多くやや早くから各県で発生した(福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎、鹿児島)。各県とも発生面積はさらに拡大し、冠水田(特に7月2日の集中豪雨)で一部被害がでた(福岡、熊本)。

斑点米カメムシ類は全般的にやや早めまたは平年と同時期の多発生(福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎、鹿児島)で、大分と宮崎ではクモヘリカメムシが主体であった。被害は山間、山麓の早植のコシヒカリ、日本晴等(福岡、佐賀、熊本)で多発傾向であった。休耕田やイネ科雑草地での無防除等が問題である。

シロトビムシ類が佐賀県の小麦で多発生し、福岡県でも一部被害をみた。

2. 畑作物・野菜

ダイズ:ハスモンヨトウは早期から大発生した県(福岡、佐賀、長崎、鹿児島)、平年時に発生した県(大分)、平年時の平年量発生(熊本)等、全般に大発生であった。8月上旬には白葉がみられ、全般的に8月下旬から急増した。暖冬と、梅雨後7月～9月の高温、少雨が大発生の要因とみられる。

コガネムシ類は福岡と熊本の一部で多発生したが、その他では少発生にとどまった。カメムシ類は、福岡の早播きダイズで、また佐賀と宮崎でもやや多発の傾向であった。夏期の高温(佐賀)、水稲からの飛来等(宮崎)が多発要因とみられる。

サツマイモ:ナカジロシタバは宮崎・鹿児島でやや多発生したがその他では並み発生であった。コガネムシ類は、大分で多発生(ヒメコガネ、トウガネアブイ、アカビロウドコガネ)し、その他ではほとんど問題にならなかった。ハスモンヨトウは鹿児島県下で多発生した。アリモドキゾウムシが鹿児島県西表市で新発生した(293ha)。沖縄ではやや多発生であった。またカンザワハダニが開聞町など南薩地域のトンネルハウスのサツマイモで

新発生し、被害が出た。

野菜類：ミナミキイロアザミウマはナス、ピーマン、キュウリ、スイカ等で、一部の県では多発生したが全般に並みの発生となり、大きな問題はなく、鎮静化の傾向にあるとみられる。オンシツコナジラミはトマト、ナス、キュウリ、メロン等で並みの発生(佐賀、大分のキュウリでやや多発生)であった。

シロイチモジヨトウは沖縄県を除く各県でネギやジャガイモを中心に発生し、福岡、長崎、大分、鹿児島では例年より発生時期が早く発生量も多かった。また本種はホウレンソウ、ラッカセイ、アスパラガス、エンドウ、ソラマメ、ニンジン、ダイズ、サトイモ、シュッコンカスミソウ、トルコギキョウ、カーネーション、グラジオラス、ヤマジノギク等の野菜・花き類で発生が確認されるとともに発生地域が広がる傾向がみられる。有効な登録薬剤がないことが防除上の難点となっている。ハスモンヨトウは沖縄を除く各県で、ダイズ圃からの移動侵入によりイチゴでも多発生し、授粉用のミツバチ放飼との

関係で薬剤の使用が制限されるため、問題が大きかった。

アブラムシ類は福岡、佐賀、長崎のイチゴや熊本、夏ダイコンとメロンでやや多発生であった。暖冬及び7~9月の高温が増殖を助長したとみられる。長崎のイチゴではワタアブラムシに対する合成ピレスロイド剤の効果が低下した。イチゴのアブラムシ類もミツバチ導入との関連で薬剤防除には困難が伴う。

ハダニ類は沖縄でナス、スイカ、ピーマン、サヤインゲンで、また佐賀のナス(露地)、熊本のイチゴ(冬、春)で、やや多発生であったがその他では問題はなかった。

コナガは長崎の冬キャベツ、大分の秋冬白菜、鹿児島の秋冬期十字花科野菜で、やや多発生した。

近年、キタネグサレセンチュウが高原野菜地帯(福岡、熊本、大分、宮崎)や平地(福岡、長崎、熊本、沖永良部島)の、根菜類、花きで発生し、さらに分布拡大の兆候があり問題である。その他、地域的問題として、大分の夏ダイコンでキスジノミハムシ、鹿児島のサトイモでイッポンセシジズメ、サヤエンドウのウラナミシジミ、

1990年稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	2,635	1,594	3,100	5,200	3,000	13,891	9,679	39
穂いもち	15,810	2,401	1,200	7,200	2,600	7,597	4,086	31
紋枯病	38,998	23,010	12,000	37,750	20,550	18,704	25,848	54
白葉枯病	1,370	226	40	30	350	58	15	17
もみ枯細菌病	27,404	17,265	9,500	17,800	13,500	6,090	13,269	-
縞葉枯病	4,848	1,062	1,000	1,000	2,000	447	5,872	1
萎縮病	4,216	354	1,300	150	2,700	1,003	6,440	-
黄萎病	1	0	50	2	-	0	1,344	-
ごま葉枯病	8,696	4,684	3,000	600	9,750	937	7,076	529
ばか苗病	3,426	1,062	1,300	100	2,850	756	3,532	4
小粒菌核病	0	0	1,000	100	950	0	-	-
心枯線虫病	53	0	-	100	5,500	346	5,064	5
内穎褐変病	-	-	-	-	-	12,427	25,064	-
(虫害)								
ニカメイチュウ第1世代	730	0	0	20	350	0	0	0
ニカメイチュウ第2世代	299	0	0	25	0	0	0	0
セジロウンカ	52,647	34,257	19,400	42,500	30,050	24,944	33,600	12
トビロウンカ	39,525	22,374	19,400	43,850	20,910	18,833	26,592	7
ヒメトビウンカ	34,677	4,891	7,000	4,000	18,600	22,597	12,591	5
ツマグロヨコバイ	45,006	27,278	16,000	32,000	41,000	26,753	24,388	127
イネゾウムシ	3,689	1,770	3,500	1,000	4,300	2,366	2,992	5
斑点米カメシ類	3,846	7,080	12,000	3,980	6,000	9,548	10,581	5
イネツトムシ	4,327	5,310	500	3,800	6,400	1,683	11,512	6
フタオビコヤガ	111	0	50	300	1,000	1,278	580	4
イネヨトウ	791	354	500	500	720	138	(散見)	0
アワヨトウ	2,872	1,770	50	500	1,050	1,236	452	0
コブノメイガ	42,371	27,518	14,000	9,800	25,120	11,682	28,636	103
イネミズゾウムシ	5,300	5,500	5,800	5,450	13,741	15,063	9,285	247
スクミリンゴガイ	5,186	1,982	967	4,500	-	1,246	2,138	56
総作付面積(256,770)	52,700	35,400	19,400	50,760	32,700	27,000	33,600	859

注) 宮崎、鹿児島などは早期、普通期の、沖縄は一、二期作の合計を示す。

ナモグリバエ、インゲンのインゲンモグリバエ等が、やや多発生であった。タバココナジラミが沖縄のウリ科、ナス科で多発した。

新発生害虫として、福岡県糸田町のミニトマトでトマトサビダニ、大分県安岐町のミニトマトでサビダニ類が確認された。またタバココナジラミは長崎 (ポインセチア)、熊本 (トマト、キュウリ、メロン、ポインセチア)、大分 (ポインセチア、ペパーミント、ノウゼンカズラ)、宮崎 (ポインセチア、トマト) で確認された。沖縄ではシロガシラによるトマト、サヤインゲンの被害がみられた。

3. 果 樹

本年も暖冬、陽性型の梅雨、7～9月の高温、少雨条件と、ヒノキ・スギの毬果が多かったこと等により、宮崎を除く各県でカメムシ類がやや早くから多発生し、カンキツ類 (早生温州等)、ナシ、カキ、モモで被害がでた。同様にハダニ類も好適気象条件により、カンキツ、ナシで多発生した。沖縄本島でミカンカメノコハムシ (仮称) が発生した。

アブラムシ類も、福岡、佐賀、長崎、大分、鹿児島のカンキツ類、ナシで多発生した。主体はワダアブラムシ (長崎はユキヤナギアブラムシ) で、各県とも合成ピレスロイド剤に対する感受性低下の傾向がみられ、問題で

ある。大分ではゴマグラカミキリが6月中・下旬に増加した。

カンキツのヤノネカイガラムシは全体に並みないし少発生で、天敵の活動も奏効して (鹿児島)、一部防除不徹底等の県 (福岡、佐賀) もみられたが、大きな問題とはならなかった。

カキのフジコナカイガラムシの発生が福岡でやや多となり、カキクダアザミウマは福岡では並みの発生、佐賀では発生地が拡大した (新しく4町)。なお、宮崎では初めての発生をみた。

4. 茶・サトウキビ

クワシロカイガラムシが福岡、佐賀、長崎、宮崎、鹿児島茶で多ないし並み発生し、防除不徹底による被害がでた。同じく茶で宮崎、鹿児島ではカンザワハダニが、福岡では、ヨモギエダシヤクが多発生し、また各地のダイズで多発したハスモンヨトウが茶を加害するに至った。チャノキイロアザミウマが福岡と鹿児島で多発生したがその他では問題とはならなかった。

サトウキビではカンシヤクシコメツキが喜界島で多発生したが、その他での発生は並みであった。またサトウキビアザミウマが沖縄本島南部でやや多発生であった他は、特に問題となった害虫はなかった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)